

新華僑二世のアイデンティティ

～中華料理人子弟の進路選択の視点から～

Identities of Second-Generation Chinese Newcomers in Japan: A Case Study of Chinese Cooks' Children's Life Courses after Graduation

趙 師哲

Zhao Shizhe

Abstract

Chinese immigrants in Japan can be classified into two groups: old comers (Rou-Kakyo), those who immigrated to Japan before the 1970s, and newcomers (Shin-kakyo), those who came to Japan after the 1980s. While some newcomer Chinese were accompanied by their children many others gave birth in Japan. These second-generation Chinese were often surrounded by their Chinese relatives and friends but grew up in Japan and therefore received the same education as many Japanese. Through semi-structured interviews, this study aims to examine the identity, particularly the occupational identity, of second-generation newcomer Chinese. It is revealed that 1) they tend not to succeed their parents' occupation, cook, 2) they speak Chinese and Japanese fluently, 3) they strongly cognize they are Chinese; however, they don't make a limitation for themselves of where to live in the future. The comparatively small, non-representative sample may not deliver definite quantitative estimates, however the results may well be used to conceptualize larger, confirmatory studies in the future.

キーワード

新華僑、二世、進路選択、中華料理人、アイデンティティ

第一章 はじめに

筆者が日本に住む時間が長くなると同時に、自分の同胞である中国人の多様性を実感している。来日当初出会った留学生をはじめ、ボランティア活動を通して出会った中国帰国者たち、その後、就労で来日した人々と知り合った。彼らは、出稼ぎのため来た人もいれば、日系企業内部の異動で来日した人もいる。更に、元留学生が勉学を終えて、そのまま日本に残って働いている人も数多くいる。また、年月が経つにつれ、永住の道を選ぶ人もいる。

一方、子ども時代から耳に入った言葉「華僑」を思い出し、周りの人たちと照らし合わせてみた。その人は「華僑」なのか、それとも「ただ日本で働いている人なのか」をよく念頭に置き、彼らは自分を「何人」だと思いかについて関心を強く持つようになった。

このように、文化間移動によるアイデンティティの変容は世代の交替によって異なるかについて、昔のボランティア活動で積み重ねたフィールドを使い、3名の若者にインタビュー調査

を試みた。本稿はインタビュー協力者の語りをアイデンティティの切口として分析し、考察を加えたものである。

日本に在留している中国人総人口は現在 74 万人を超え、日本社会で一番大きなエスニックグループである。彼らはどのようなアイデンティティを持って日本にいたかが、日本の多文化共生に関する議論では欠かせない話題になると考えられる。具体的には、本研究の主な目的は、「中華料理人」として日本に長年滞在した華僑らの社会階層が子弟のアイデンティティにもたらす影響を分析することである。

第二章 先行研究

2.1 華僑、華人、新華僑、老華僑

中国人、より広くは中国系人で、海外に居留する人々を中国語で包括的に総称して「華僑」と表現する（可児・斯波・遊，2002）。さらに、「新華僑」と「老華僑」は反対概念であり、この語には3種類の意味ないし用語法がある。本研究では1979年から中国大陸での改革開放後、海外に出た者を「新華僑」と呼ぶ¹⁾。「老華僑」はそれに対して改革開放の前から既に日本にいる中国人のことを指す。新・老華僑の比率を2000年の入国管理局の統計から見れば、もうすでに新華僑の人口は老華僑の人口の9倍（可児他，2002）に達し、2018年現在も新華僑の人口が老華僑を遥かに上回るであろう。一方、「華人」は中国人で現地国籍に帰化した人を表す（可児他，2002）。

2.2 華僑のアイデンティティ

日本にいる華僑華人に関する先行文献を調べた結果、今までの華僑のアイデンティティに関する先行研究のほとんどは「老華僑」のアイデンティティについてであり、「新華僑」を研究対象とする研究は非常に少ないと分かった。

まず、老華僑のアイデンティティについて以下の日本の研究を用いて簡単にまとめておく。過（1999）は「老華僑」を第一世代から第五世代に分けて分析し、若い世代の華僑のアイデンティティについては、「戦後、在日華僑社会の変化とともに在日華僑のアイデンティティは変容し、より重層的かつ多様化の傾向を示している」と述べている。その中では、「中国人としての誇り」を持って生きていこうとしている若者もいれば、中国か日本かどちらかの国籍を持ちながらマージナル・マン、アジア人、国際人、地球人として生きていこうとしている者もいる。また日本国籍を取得して華人として暮らしているものも少なくない。三世から五世のグループのアイデンティティは1) 中国人のアイデンティティ、2) ダブル・アイデンティティ、3) 日本人のアイデンティティ、4) マージナル・マン、5) トランスナショナルアイデンティティに分けられるとしている。

老華僑二世のアイデンティティについて、張（2005）は「同郷人とのつながり、中国籍の保持や、結婚相手の出身地へのこだわりなど、強い中国人意識を保持している」と述べている。また、「子女に中国語を習得させるが、中国国籍を保持したり中国人と結婚することなどを強要

しない、などの考えから、華僑二世は、自分も子供も日本社会で生活していくための便宜を図っている」と記述している。言い換えれば、エスニック・アイデンティティの確立・維持には、第一に何らかの形で華僑社会や中国文化との関わりを持つことが極めて重要である。

次に、新華僑一世について、社会学の視点からの研究は数多くあるが、アイデンティティに焦点を絞るものは調べた限りでは見つからなかった。朱(1995)では新華僑華人の主な「源泉」である留学生、就学生、日本人の配偶者などを中心として調査を行って、新華僑華人の社会の発展形勢及びその原因を探求した。彼らの大量流入・居住は日本華僑華人の社会の「量」および「質」に激変をもたらし、新・老華僑の構成比率を逆転させているという結果になった。また、段(2000)では、1970年代以降の日本留学ブームが新華僑華人社会に与えた影響を探求した。これらはやや古くて、ほとんどは「新華僑一世」に関する研究である。

しかし、「若い華僑のアイデンティティの変容によって、華僑社会の行き方は大きく左右されることになる」（過, 1999）と言われるため、今後「新華僑」のアイデンティティについてさらに調査すべきだと考えられる。新華僑二世のアイデンティティについての研究は、調べている限りでは2本のみである。

まず、朱(2003)は新華僑二世の文化的アイデンティティに関して、「中国の伝統文化から離れていくそのスピードは、老華僑華人の二世を遥かに凌いでいる」（p. 197）と述べている。また、新華僑二世が、老華僑四世、五世が持つような、日本人であり且つ中国人でもあるとする中間人のような認識を持つことが予想される（朱, 2003）。次に、永井(2015)は新華僑二世では「中国人としてのアイデンティティが保持されていた」との結論を出した。その理由は「強い親の影響、中国や中国語との多くの接触などで、急速な日本化を阻止」されたことを挙げている（永井, 2015）。

以上、わずか2本の「新華僑」アイデンティティについての研究では、見解の一致が見られない。特に永井研究は本研究にとって大変参考になる先行研究であるが、2点について指摘したい。1点目、永井論文の協力者は全員日本の大学を出ている高学歴者だが、日本にいる外国人の高校進学率は事実上50%に過ぎないと言われている。たとえ中国人の親が熱心に教育しても、全員が大学に進学するとは限らない。つまり、永井の研究結果は、高学歴者のアイデンティティだけを反映していると考えられる。2点目、永井論文で新華僑の特徴を説明した時に、「元留学生」または「企業や大学、研究機関などに就職する人」たちをイメージしたにもかかわらず、協力者の親たちの職業を見て分かるように、全員がそうとは限らない。9人のうち、3人の親は日本で飲食関係の仕事に就いている。本研究では、ブルーカラーの親たちの教育方針が子供のアイデンティティにどのような影響を与えるかをさらに研究する。

二世のアイデンティティは一世の影響と切り離して論じることができないため、本研究では親（新華僑一世）の社会階層が、子ども（新華僑二世）のアイデンティティにどのような影響をもたらすかを明白にする。

2.3 職業及び階級的アイデンティティ

Giddens (1991) の指摘するように、自己のアイデンティティはいくつかの自己を語るができる物語の中から、ある一つの語りを持続できる力なのである。またホール Hall (1992) もアイデンティティは自己の中で語られたものであると述べている。本研究では Giddens (1991) や Hall (1992) に依拠して、個人の自己についての語りを通して自己のアイデンティティの形成過程を捉える。そして、そのような自己についての語りの中で、エスニシティ、国籍、文化、言語、職業について、いかに語られているのかを検討することを通して、それらのアイデンティティと自己形成との関わりを考察する。

Cushman & Wang (1988) の研究によると、戦後の華僑華人社会の変化により、東南アジアの華僑華人のアイデンティティは、歴史的アイデンティティ、中華ナショナリスト・アイデンティティ、共同社会アイデンティティ、現地ナショナリスト・アイデンティティ、文化的アイデンティティ、エスニック・アイデンティティ、階級的アイデンティティの7種類からなりたっている。本研究では、Cushman & Wang (1988) の概念に照らし合わせて、中華ナショナリスト・アイデンティティ、現地ナショナリスト・アイデンティティ、職業が代表とする階級的アイデンティティを中心に考察していく。

新華僑は老華僑と比べ、居住地、従事している職業、生活レベル、などが非常に多様である。老華僑は横浜、阪神地域などに集中し、伝統的なエスニック産業に従事することに対して、新華僑には高学歴で専門知識や技術を持つものが多く、新華僑は日本に定住する傾向が強く、もともと留学生などとして来日し、大学や大学院を卒業後、企業や大学、研究機関などに就職し、日本で生活基盤を築いているものが多いなどの特徴を挙げることができる (陳, 2003)。一方、老華僑は、いわゆる「三把刀」(裁縫、理髪、調理) に携わる人が多かった。しかし、現代日本に残っているのは「料理人」のみとなる。

また、在留資格から見れば、居住関係 (日本人配偶者、定住、永住など) と就労関係 (技術人文知識国際業務、教育、技能など) で大別ができる。今回の調査では「就労」目的で来日した人々に焦点を絞り、別の研究で「元留学生グループ」のホワイトカラーとの比較対象になる「中華料理人」のブルーカラーについて調査を行った。ブルーカラーの中でも他のビザ (例えば、技能実習) で滞在している人もいるが、家族同伴の可能性のあるのは「技能」のみになっている。また、「技能」ビザで滞在する人口は 15,000 人を超えているので、子連れの人も少なくないと考えられ、それら二世のアイデンティティに関する問題は決して個人の問題ではない。親 (新華僑一世) の社会階層は、子ども (新華僑二世) のアイデンティティにどのような影響をもたらすか。

第三章 調査

追跡調査の一環として、筆者がかつて調査してきた3人の協力者の高校進学問題を踏まえ、それから4年が経過した状況を分析し、今までの学校生活及び親の教育方針が彼らのアイデンティティにどのような影響しているかを明らかにする。彼ら3人の共通点は、親が「中華料理

人」として日本に長年滞在していることである。本調査が新華僑二世のアイデンティティに関する調査のパイロット調査になることが望ましい。

3.1 調査対象者

筆者は、2011～2012年に調査した当時中学校三年生の男子生徒2名と二年生の男子生徒1名に対し、追跡調査を実施した。彼らは2013年当時と変わらず、東京都A区に在住し、義務教育終了後、それぞれ異なった生活を送っている。現在2名は大学1年生で、1人は定時制高校4年生である。3名の協力者へ本研究の趣旨を説明した上で、2018年5月～6月に1人につき約1時間半の半構造化インタビュー調査を行った。

3.2 手続き

調査協力者に対しては事前に質問項目を提示したが、当日の話の流れに応じて、質問の変更や追加を行い、自由な反応を引き出す半構造化インタビューを実施した。事前に提示した質問項目は、1)現在の交友範囲、2)自分はどこの国の人だと思うか、3)将来への展望、4)親からの期待であった。中学校卒業してから4年間のことを振り返り、自分の中の変化について述べてもらった。そこから、成長過程の中における親の教育方針や影響を洗い出した。すべての音声をICレコーダーに録音し、録音データの逐語録を作成した。分析の手順は、意味のまとまりのコーディングを行い、データを個別にM-GTA(木下, 2014)を用いてカテゴリを作り出し、協力者の気づきを分析した上で、先行研究と比較し考察を行った。

第四章 結果

調査の結果、義務教育後の進路が異なるにもかかわらず、1)老華僑と異なり、親世代から中華料理人という職業アイデンティティを継がない傾向がある、2)現代通信メディアの普及により、中国語が維持できる、3)将来の生活拠点は決まっていなくてもかわらず、中国人だと強く主張し、「純粋中国人」(永井, 2015)ではあるが、日中両国の言語及び文化や価値観を持つという3つの共通点を挙げる事ができた。

4.1 職業アイデンティティ

A君は現在定時制高校の4年生である。「良い仕事を見つけ、良い嫁を見つけ」、「専門学校を卒業して、オフィスの中の仕事に就いてほしい」という親の理想に対して、本人の夢は「専門学校を卒業して、しばらくどこかで就職し、貯金ができたらパソコン関係の起業をしたい」である。「もし、お父さんが中華料理店を持つようになったら、あなたは調理を習いたいですか」という筆者の質問に対して、彼は「習いません」とはっきり答えた。その理由としては、前は習いたかったが、「コックさんの道は長いし、上手くできなかつたら、時間の無駄になるそうで、お母さんが習わせたくない」そうである。

A: 「他俩的目的就是希望让我上去, 找个好工作, 娶个好媳妇」。「我妈希望能上学, 上专门 找个好工作, 坐办公室的工作, 她的心愿就了了, 找个好媳妇」。「我也是想着上专门, 我想着是先干三

年，攒点儿钱，然后自己干」。(ZHAO:「你能干什么(笑)?」) A:「我想看到时候的经济状况，现在決められない。(ZHAO:「大概齐呢?」) A:「我想的是电脑方面的，但是还没学过」。(ZHAO:「真的开店了，你想学厨艺吗?」) A:「不学，之前想学来着，我妈不让我学」。「厨师的路太长，学好了行，学不好了就废了」。

B君は去年大学に合格したが、専攻が中国語である理由で親に反対され、一年間家の店を手伝っていた。今年再度大学入学試験を受け、去年と異なった学科に合格したため、親に入学の許可をもらった。しかし、「現在通っている文系の学部に対して、将来就職できるかどうかの不安を持っている」ので、「もう一度理系を勉強したい」、「パソコンを習って、卒業したらすぐ就職をしたい」と言っていた。また、「家のお店を手伝いながら、大学に通いたい」と思っていて、現在の目標は「無事卒業して、仕事を頑張りたい」である。理想の仕事について「日中英三カ国語を使う仕事に就きたい」と語っていた。

B:「然后我就是想重新考理科。学电脑，毕业之后直接上班」。「我爸说了，要是不上学的话，在这个店里当服务员，国民健康保险可以直接给上，我的话是想上学，毕业之后找份工作，一边上学，一边看店。目前的理想。毕业之后找个工作，好好上班，好好挣钱」。(「理想的工作是什么样子的?」) B:「最好两种语言都用得上的吧，中文日语英语都用得上的吧」。

C君は現在大学一年生で、英語を専門として学習している。「現在大学で勉強している英語を使う仕事に就きたい」、「少なくとも空港で働きたい」と言っていた。料理に対して「大変疲れる仕事」というイメージを持ち、「キッチンも調理も好きではなく、お父さんみたいな料理人にはなりたくない」とはっきりと断った。

(ZHAO:「你以后想做什么工作?」) C:「这个我倒没有想过吧，在机场什么的，在外企什么的」。「反正老师我是不感兴趣，嗯嗯嗯，想用英语工作」。「我，没想过，最低是在机场，最低标准。最高的话就没有限度了。在大公司什么的」(ZHAO:「你想跟你爸一样，学个手艺做厨师吗?」) C:「绝对不会」、「很累呀，我不喜欢厨房，不喜欢做菜，不喜欢油油的东西。所以反正不太喜欢」。

三人の共通点としては、「料理人」という職業を継ぎたがらない傾向がある。また越境に伴い、身についた言語能力を生かしたいという希望が強いことが明らかになった。

4.2 言語アイデンティティ

A君は小学校5年の時に来日し、一年間だけで日本語を流暢に喋れるようになった。中国語を維持するために中国語教室に通わせられたこともあった。また、「中国語を忘れていないのは、パソコンのシステムが中国語だから」と語った。

A: 「小学五年级来的, 六年级就ぺらぺら」。「我小的时候, 我妈让我去池袋学中文, 因为她怕我忘了」。「之后慢慢长大了, 我觉得没有用, 感觉就是往里面搭钱」。「喜欢电脑, 系统是中文, 打字也是中文, 我觉得因为这个才没忘中文」。「之前有一段时间 觉得说中文恥ずかしい, 在センター就不说中文了, 都说日语, 后来再说中文的是, C来了之后」。

B 君と出会った時は、まだ彼が日本に来たばかりで、日本語をあまり喋れなかった。現在は大学1年生で、「日本語は日常の会話だけではなく、授業もついて行ける」と言っていた。「特にリスニングとスピーキングは問題ないが、読み書きがまだ難しいと感じている」ようである。中国語についてはまったく問題ない。

B: 「日常交流还行吧, 但是有的时候还是有一两个词不懂不会, 就问他们」。「老师讲课能听懂」。「听说没有问题, 读写有问题」。「中文很好不需要特别补习」。

C 君は現在大学一年生で、B 君と同様に、筆者と出会った時にはまだ日本に来て間もなく、日本語はあまり喋れなかった。C 君は 3 人の中で、唯一日本に来て良かったと言った協力者である。「日本に来て、日本語を喋れるようになった」と言っていた。現在は英語を専門とする学部に進学し、英語も日本語も鍛えている。本人は、「三ヶ国語を喋ることで、就職はなんとかなる」との考え方を持っている。また、「中国語を喋るチャンスが少ないため、下手になっている」という話もあった。

C: 「其实来了也挺好的, 我要是不来的话, 肯定不会说日语, 也肯定不会说英语, 也肯定不会经历过这么多吧。」(ZHAO: 「还是挺难的吧, 从一开始一句话都不会说, 现在什么程度?」) C: 「应该英语跟日语都差不多了, ビジネスまでは行かないけど、日常会話以上左右」(ZHAO: 「课呢, 听得懂吗?」) C: 「完全听得」。「就觉得说英语挺酷的, 要是能说三种语言, 怎么样也能找到一份工作吧」。「我觉得我的中文, 都在退步。因为不怎么说。」

三人とも母語である中国語を忘れていないが、C 君が言ったように「中国語を喋るチャンスが少ないため、下手になっている」、三人との会話は中国語で行ったが、日本語が混じっている現象が目立つ。

4.3 エスニック・アイデンティティ

A 君は「自分のことをどの国の人だと思う」という質問項目に対して、はっきりと「もちろん中国人です。帰化しても中国人です。国籍を変えるのは便宜のためです。まあ、目的性がある帰化になりますね」と答えた。また、「高校2年生まで、中国に帰りたかったのですが、今はどんな考えも持っていません。彼女次第です。」と補足した。さらに、日本生まれのいとこと比較しながら、「中国人というアイデンティティを隠したい考えはっさいありません」と言って

いた。

A: 「肯定是中国人，就算改日本国籍也是中国人。因为我要是改国籍的话，我只为了方便。这就是有目的性的改国籍吧」。「初中到高2想回国上班，现在，没有想回国的想法，什么想法都没有。~~（彼女）在哪儿，我在哪儿」。(ZHAO: 「有想隐藏中国人的想法吗?」) A: 「完全没有」。

B君は同じ質問項目に対して以下のように答えた。「中国人です。中国生まれ、親も中国人で、中国育ちだからです。日本に来て、日本が好きでも、中国人です」。また帰化に対して、以下のような考えを持っているようである。「帰化してもしなくても別に良いです。前は帰化したかったんですが、それは海外旅行に行きやすいためです。でも年に一回二回しかないから、別に帰化しなくても良いです」と言っていた。さらに、将来について、B君は「日本に残りたいです。中国に帰っても仕事がないです。日本の環境に慣れました。この前一時帰国したときに、あんまり中国の環境が好きではありませんでした」と語った。具体的に「中国では付き合いをしないといけません。コネクションも大事だし。日本では自分の能力だけで判断されます。中国より平等です」と補足した。ただ、「親はいずれ中国に帰ろうと思っている」と言っていた。

B: 「中国人呀，为什么是日本人?」「没想过自己是日本人啊。在中国生的，爸妈都是中国人，从小在中国长大的。就算来日本了，喜欢日本，不也是中国人嘛。」B: 「我是无所谓了，申不申请都一样。以前是想申请，去哪儿都方便嘛。日本国籍去那些欧洲国家，不要签证带一两个月，中国国籍还要申请签证。这次去台湾也是，日本人到了，下了飞机就能直接出去，中国人需要登录许可。挺麻烦的我觉得。现在的话，无所谓，反正也不经常出国嘛，出国也就一年去个一次两次」

B: 「我，就留在日本呗…回去能干什么啊? 什么也干不了啊，不是，也能，就是环境不一样吧，怎么说，习惯这边吧。之前回国，就是完全不习惯…环境不喜欢，怎么说，就是早上7,8点起，出去整点早餐…人情也有吧，每次回国，都是跟这个吃饭，跟那个吃饭，很麻烦…在中国还要走个后门什么的。在日本就是全靠自己能干就干，不能干就算了。在中国就是不能干给点儿钱也能干。不喜欢这样…在日本感觉就是全都是平等吧。好像，在中国有钱就是特别有钱，没有钱就是特别没有钱，那种」。B: 「他们在中国多少年了啊，30,40年了，肯定想回中国啊，不喜欢日本」。

C君については、中国に帰りたいかという質問に対する答えは、「日本にはいたくない」だった。「ふるさとに帰っても仕事がないし、他の都市に行っても競争が激しいし、だから中国にも帰りたくない。日本以外の外国に行きたい」と言っていた。国籍を変えることについては拒否感を持っている。また、中国人という出自の認識が強く、日本人らしさはまったくないと語った。「小学校の時に来日していたら、また現在と違うかもしれない」と言った。また、家ではあまり中国の年中行事が行われず、旧正月などの雰囲気を感じられない。

(ZHAO: 「以后你想回国吗?」) C: 「反正我不想呆在日本」。「累，回国的话，也不是在自己的

家乡，因为那个地方很小，肯定赚不到什么钱。国内人口也挺多的，竞争也比较强，所以，国内也不怎么想回去。想去国外。」(ZHAO:「你打算申请日本国籍吗?」) C:「不改」(ZHAO:「有原因吗?」) C:「没有原因吧，我爱国啊」(ZHAO:「那你说不想回国?」) C:「国籍是肯定不想改的。」(「你觉得你是中国人，还是日本人还是什么人」) C:「中国人，中国人」。(ZHAO:「没有一点日本的元素在里面吗?」) C:「没有。怎么说啊，变不了，如果我是小学来的话，可能会有一点想发，可能会有一点日本人的性格在里面，我觉得，就是中国人」。(ZHAO:「像逢年过节，你家还会保持中国的传统吗?」) C:「很少吧，很少一起」，「我过年啊，什么的，一点气氛都没有，就是，根本都想不起来，都。什么前一段时间520啊，我都没有什么印象了，就是，真的想不起来，中国的节日啊什么的，都快忘的差不多了」。

三名の協力者のエスニック・アイデンティティを見てみると、全員中国人だと主張している。しかし、将来の生活拠点を決めていないことも分かった。国籍イコールパスポートという考え方も見られた。

4.4 一世の期待と教育方針

A君は、将来日本にいることも、中国に帰ることも、親は強制しない。現在は、定時制高校に通っているが、もし専門学校に進学できたら、親から学費をもらえると聞いた。

A:「寒假暑假，不太干涉，不回去就打工」。「我妈没想过我在日本还是在中国待着，她不管，她觉得都OK」。「高中没好好去，原本就选了四年」。「我妈妈跟我开玩笑说选四年吧」。「定时制，比较便宜，爸爸妈妈给掏学费」。「上专门的话，还给交学费」。

B君は昨年度一度大学入試を受け、中国語学部合格したが、父に反対され、入学しなかった。今年は他の学部に変えて大学入試を受け、親の同意をもらった。将来の生活拠点については、親から特にアドバイスももらっていない。

B:「当时女朋友考～～大学的中国语学部，我也就考了那里，我爸没让我去，又换了一个学部，综合政策，就去了」。「觉得学不学中国语没有用，没上我去，第二年换了个综合政策，学费理事，就让我去了」。「不管我，想去哪儿去哪儿」。

C君もB君と同様に私立大学に通っている。最初は多額の学費で母に反対されたが、親たちは教育に恵まれていなかったのので、息子を大学に通わせたいと思っている。勉強について、特に親からアドバイスももらったことはない。その理由はアドバイスをしようとしても分からないからである。将来について、親たちはお金持ちになってほしいと思っている。他は特にない。ただ、外国人の嫁はあまり望ましくないと言った。しかし、C君本人は中国人と付き合いたくないと言っていた。

C:「家里不出没办法哪，那就不能上学了，还是想让，他们俩都没怎么上过学，我爸高中毕业，我妈小学就毕业了。还是想让我上学吧」。「他们不管，我自己想学什么就学什么。我从高中开始，他们就没太管学习呀，没太怎么干扰我」。(ZHAO:「怎么听说一开始，你妈妈反对了一下你上这个大学?」)「没有啊。就是学费太贵了嘛，学费太贵了，每太想让我上，但是最后还是想让我学习嘛，没办法了，没钱也得上」。「他们也没怎么管我。我自己选的哪个大学，自己选的哪个高中。他们想管也不懂」。(ZHAO:「你爸爸妈妈希望你将来是什么样子的?」)「变有钱就可以了呗。也没有什么期待吧，就是想让我，我妈妈想让我，不喜欢外国人的媳妇，但是我觉得我不想找中国人」。

三名の協力者の共通点は、親世代があまり教育機会に恵まれていなかったもので、生活基盤がまだ安定していないが、子どもの教育には投資していることである。

第五章 事例分析と考察

5.1 歴史から見た「中華料理人」

今回の研究対象者を「中華料理人」の子弟に絞った理由の1つは、中国人の移民の歴史から見れば、いわゆる「三把刀」(裁縫、理髪、調理)に携わる人が古くから多かったからである。また、現在まで維持されてきた在日華僑華人の定番の職業は「料理人」のみと考えられる。しかし、3人の協力者の語りを整理し、その中の共通点の一つは3人の協力者の将来への展望について、誰も父親の「料理人」という職業を継ぐ予定はない。その一つの理由は「親が調理を習わせたくない」、「子どもがホワイトカラーの仕事に就いてほしい」という親の希望と影響を挙げることができる。老華僑たちの家業を継ぐ傾向とまったく異なることが分かった。

3名の協力者の親たちは中国で苦しい生活を余儀なくされて出稼ぎを始め、現在日本の中華料理店で働いているということを筆者の修士論文(趙, 2013)で分かった。また、中国における親の「職業」や「学歴」などによって、子どもたちの高校進学に不利益がもたらされることも分かった。それらの背景に基づき、「親が調理を習わせたくない」、「子どもにはホワイトカラーの仕事に就いてほしい」などの親の発言を理解できるだろう。子どもたちを自分と同様な貧しい生活を送らせたくなく、次世代により良い暮らしをさせたいことが、それらの発言の出発点だと考えられる。

一方、同じ中華料理人の子弟に関する先行研究において、山本(2002)はロンドンの中国系第二世代に関する調査から、イギリス社会の学校教育を受けても、ほとんどのものは中国人としてのアイデンティティも保持していたことが分かった。また、保持されている差異の意識も、集合的なシンボルや文化要素に規定された既存の集団の一員としての意識ではなく、個人的な経験を通して保持されているものであることが特徴と述べている。ここでの個人的な経験の主なものは、親が営むテイクアウトの店を手伝うことを指している。店を継ぐかどうかとは別に、親の職業を通して自分の中国人のアイデンティティを認識でき、イギリスの事例と比較すると、

本調査でインタビューした3名は親の職業で自分が中国人だと認識している人がいなかったことが明らかになった。

更に、老華僑たちが家業（料理人や理髪業など）を継ぐ傾向が高い理由は社会背景にある。外国人が日本の企業に就職できなかった時代では、子供の教育の価値と意味を理解することができなかった親が多く、大学入試に合格した子供の入学を拒否する人も珍しくなかった（鐘, 2017）。従って、当時の日本社会では、ほとんどの中国人は子どもたちを高等教育機関に送らず、家業の手伝いをさせた。このように、本研究は老華僑の場合との差異が見られた。新華僑たちは来日間もなく、まだ生活の基盤が安定していないにもかかわらず、子どもたちの教育に投資を惜しまない。教育を通して、経済状況を改善し階層移動を実現し、親世代より良い生活を暮らしてほしいのは新華僑一世の願いだろう。

5.2 人口から見た「中華料理人」

「中華料理人」の子弟に絞ったもう一つの理由は在留資格にある。法務省（2017）によると「技能」ビザで滞在する人口は15,000人を超え、子連れの人も少なくないと考えられ、それら二世のアイデンティティ問題は決して個人の問題ではないと思われる。永井（2015）の研究で扱う幼い頃に来日した協力者とは異なり、本研究の3名協力者は全員小学校高学年、または中学校在学時に来日した。高校進学時点では、日本語の不利益が出るかもしれないが、母語の中国語がしっかり身につけている。来日後、周りの環境は日本語が多いにもかかわらず、現代通信手段であるパソコンや携帯電話に中国語を入れたりするため、身近な交友範囲に限らず、本国出身者と頻繁に連絡を取り合っている。中国語と日本語を若干交わりながら喋るシーンがあるにも関わらず、言語的アイデンティティの揺らぎはなかった。なお、将来への展望についての語りから、自分の言語能力を生かせる仕事に就きたいことが3名の協力者の話しから分かった。

日本に滞在する中国人を詳しく見てみると、「技能」ビザの保有者数は15,000人を超えたが、長年に日本に住むと「永住」の資格を申請する可能性がある。現在日本に滞在する中国人の3分の1は「永住」の資格を持って、彼らの中で中華料理人として働いている人も少なくないはずである。従って、実際に中華料理人の人数は15,000人を遥かに上回ると考えられる。

本調査の協力者3名とも、特にB君とC君は、以前の調査（趙, 2013）の時より日本語が上達になって、支障なく話せた。しかし、趙（2013）は料理人たちがビザが下りるかどうかについてとても心配していることを述べている。将来についての不安定さを理由とし、日本語の勉強に対して抵抗感を持っている子もいると言えるだろう。そうであれば、言語アイデンティティはまた今回の3名と異なるだろう。

一方、「教授」、「経営・管理」、「技術・人文知識・国際業務」、「企業内転勤」など、いわゆる highly skilled Chinese (Achenbach, 2015) と呼ばれる人々を合計すると、10万人近くに上る。彼らは「永住」ではないが、ある程度日本に長く居住することができる。将来中国に帰るかもしれないが、具体的な帰国の計画を立てていない。坪谷（2008）ではこのような人たちを

「永続的ソジョナー」と呼ぶ。坪谷（2008）によると、彼らは次世代の「エスニック・アイデンティティ」を保持させるために長期休暇を使い、子どもたちを中国に送り出したり、日本の学校教育が不十分と感じ、塾に行かせたりしている。こちらのグループに属する新華僑二世のアイデンティティについては、また別の研究で論じたい。

5.3 アイデンティティ変容から見た「中華料理人」

最後に、3人の協力者の交友範囲は異なるが、いずれも「純粋中国人」（永井，2015）と言えるほど、自分が中国人であることを強く主張している。この点は朱（2003）が述べた「老華僑四世、五世が持つような、日本人であり、中国人でもある」、または永井（2015）が述べたような「複合的なアイデンティティ」といった新華僑二世のアイデンティティとは明らかに異なる。3人とも「純粋中国人」だが、将来の生活拠点には拘りはなく、中国、日本、または他の外国の選択肢を持っている。過（1999）は老華僑三世から五世グループのアイデンティティを 1) 中国人のアイデンティティ、2) ダブル・アイデンティティ、3) 日本人のアイデンティティ、4) マージナル・マン、5) トランスナショナルアイデンティティ、5つのパターンに分けた。本調査の協力者たちは自分の言語能力を生かして、生活拠点に拘らなく生活していこうとする姿勢は上述の5つ目のトランスナショナルアイデンティティに相当すると考えられるだろう。

譚・劉（2008）は「新華僑」と呼ばれたいくない人々に意見を聞き、「海外在住中国人」の方が好まれると述べている。この言葉に暗に含んでいる意味は、「見識があり、知的職業につき、社会的に活躍する中国の知識人」ということなのである。それゆえ、たとえ「新」の字が頭についていたとしても、「三把刀」に象徴される古いイメージの「華僑」という言葉で総称されることに抵抗感があるのではないだろうか。職業が異なると、自分自身のことをどう見るかがまた違って来るだろう。従って、5.2節で言及した highly skilled Chinese グループは、上記の「海外在住中国人」という呼び方を好む人たちと一致するだろう。また彼らの次世代のアイデンティティ変容にどんな傾向があるかを今後考察していきたい。

第六章 結論と今後の課題

今回の調査をまとめると、3名の協力者の語りから、彼らのアイデンティティについて 1) 中華料理人という親の職業を継がない、2) 言語アイデンティティの揺らぎはない、3) 日中両国の言語及び文化や価値観を持っているが、強く中国人だと認識している、という三つの共通点を挙げる事ができた。この三点に影響しているのは親の教育方針だと考えられる。出稼ぎで来日した親たちは子どもを自分たちより良い生活を送ってほしいという念願を持ち、教育への投資を惜しまない。また、子ども世代も言語という武器を生かし、中華料理人より良い仕事に就きたい。更に中国人だと強く主張しているが、将来の生活拠点にこだわらないのは、トランスナショナルアイデンティティに理由があると考えられる。

今回の分析の対象は3人に限られ、一般化することは不可能である。また、今回の3人の協力者とも男子生徒であるため、ジェンダーの問題については、調査で明らかにすることができ

なかった。今後は協力者の人数を増やし、中華料理人子弟のアイデンティティに関する調査を掘り下げていきたい。更に、今回の研究対象として「中華料理人」である「技能」労働者の子弟のアイデンティティ問題を取り上げたが、彼らの独自の問題を掘り出すためには、いわゆる「グローバル・エリート」の子弟が抱える問題や国際結婚によって生まれた日中混血児を取り巻く問題も分析し、比較する必要があるだろう。この点についても今後の課題にしたい。本研究を今後さらに増える新華僑二世及び新しく来日する中国人にとって、自分のアイデンティティを理解する一例として広げていきたい²⁾。

注

- 1) 残りの2種類の意味は、第一はごく一般的な言い方だが、新しく華僑となった者を旧来の華僑から区別している呼び方である。第二は日本で見られた用法だが、第2次世界大戦前からの中国大陸華僑に対して、戦後まもなく台湾から来た中国人を指した呼び方である。当時、日本は台湾政権と外交関係があり、大陸側とは国交がないという正常ではない状態が1972年の日中国交正常化まで続いたため、中国大陸からの中国人の来日は基本的に停止する一方、台湾からの渡来が増え、一時は全華僑の半数近くを占めた（可児他，2002）。
- 2) 本研究は平成30年度愛知淑徳大学助成金により実施された。本研究結果の一部は、多文化関係学会第17回年次大会（2018）で発表された。

参考文献

- Achenbach, R. (2015) *.Return Migration Decisions: A Study on Highly Skilled Chinese in Japan*. Wiesbaden: Springer Nature.
- 陳 天璽 (2003). 第9章 中国人——日本社会と新華僑—— 駒井 洋 (編著) 多文化社会への道 (pp. 231-260) 明石書店
- Cushman, J., & Wang, G. (Eds.). (1988). *Changing Identities of the Southeast Asian Chinese since World War II*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- 段 躍中 (2000). 現代中国人の日本留学に関する研究 新潟大学2000年博士論文
- Giddens, A.(1991). *Modernity and Self Identity*. Cambridge: Polity Press.
- 過 放 (1999). 在日華僑のアイデンティティの変容 東信堂
- Hall,S. (1992). New Ethnicities. Donald, J. & Rattansi A. (Ed.), *'Race', Culture and Difference* (pp. 252-259), London: Sage Publications.
- 法務省(2017). 在留外国人統計 2017年12月 Retrieved from http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html 最終閲覧日 2018年12月7日
- 可児 弘明・斯波 義信・游 仲勲 (編) (2002). 華僑・華人事典 弘文堂
- 木下 康仁 (2014). グランデッド・セオリー論 弘文堂

- 永井 智香子 (2015). 新華僑二世のアイデンティティを探る 多文化関係学, 12, 3-20.
- 譚 璐美・劉 傑 (2008). 新華僑 老華僑——変容する日本の中国人社会 文春新書
- 坪谷 美欧子 (2008). 「永続的ソジョナー」中国人のアイデンティティ——中国からの日本留学に見る国際移民システム—— 有信堂高文社
- 山本 須美子 (2002). 文化境界とアイデンティティ——ロンドンの中国系第二世代—— 九州大学出版会
- 張 玉玲 (2005). ミクロな視点から見る在日華僑のアイデンティティの形成過程——二世、三世および「リターン者」のライフ・ヒストリーを通して—— 国立民族学博物館研究報告 30 57-91
- 趙 師哲 (2013). 滞日外国人生徒の高校進学に関する研究：中国人技能労働者子弟の事例を中心に 2013年度修士論文 未刊行 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科
- 鐘 家新 (2017). 在日華僑華人の現在社会学——越境者たちのライフ・ヒストリー ミネルヴァ書房
- 朱 慧玲 (2003). 日本華僑華人社会の変遷 日本僑報社